



「将来を期待される日本の清教生」

2022年3月



理事長・チャプレン 井上 良作

では、尋ねよう。ユダヤ人がつまずいたとは、倒れてしまったということなのか。決してそうではない。かえって、彼らの罪によって異邦人に救いがもたらされる結果になりましたが、それは彼らにねたみを起こさせるためだったのです。彼らの罪が世の富となり、彼らの失敗が異邦人の富となるのであれば、まして彼らが皆救いにあずかるとすれば、どんなにかすばらしいことでしょう。

(ローマの信徒への手紙11章11-12節)

3月はキリスト教会の暦で受難節にあたります。2022年においては、受難節は3月2日に始まり4月14日まで続きます。4月15日金曜日が受難日としてイエス・キリストが十字架上で苦難を受けられたことを覚える日であり、4月17日の日曜日に復活祭(イースター)を迎えます。イエス・キリストがすべての人の罪を贖^{あがな}う死を遂げられた後に甦^{よみがえ}って死を滅ぼされたのですから、イースターは全世界のキリスト教会にとり最も喜ばしい祝祭日です。

イエス・キリストはアブラハム、ダビデの家系から生まれると預言されていたユダヤ人のメシアとして世に来られました。

ひとりのみどりごがわたしたちのために生まれた。

ひとりの男の子がわたしたちに与えられた。

権威が彼の肩にある。

その名は「驚くべき指導者、力ある神

永遠の父、平和の君」と唱えられる。

ダビデの王座とその王国に権威は増し

平和は絶えることがない。

王国は正義と恵みの業によって

今もそしてとこしえに、立てられ支えられる。

万軍の主の熱意がこれを成し遂げる。

(イザヤ書9章5-6節)

ところが、ユダヤ人はこのメシアを受け入れず十字架上の死へと追いやりました。これが冒頭聖句の「ユダヤ人がつまずいた」ということです。ところが、『ああ、神の富と知恵と知識のなんと深いこ

(次ページに続く)



と。』(ローマの信徒への手紙11章33節)ユダヤ人が拒絶したことによってメシアによる救済は異邦人(全世界のユダヤ人以外の人々)へ向けられました。それは、異邦人がイエス・キリストを知り幸いを得ている姿を見ることによってユダヤ人が異邦人をねたむほどに神様の愛を求めるようになるためであり、やがて必ずユダヤ人もイエスをメシアとして受け入れるようになるためでした。そうして神様は世界を完成されるということが壮大な神様の計画であり聖書の歴史観なのです。

しかし、そこへ至る途上で、ユダヤ人は1900年間も国を失い凄まじい苦難を受けました。第二次世界大戦中のナチスによるホロコーストでは600万人もの人々が命を奪われました。戦後、西洋世界はユダヤ人を迫害したこと、それを黙認したことを反省し二度と繰り返さないことを誓いました。今日、反ユダヤ主義が時折姿を現した際には、最も危険で邪悪であると非難されます。

今冬、国際社会による相次ぐ非難決議や制裁法施行に遅れること遙かに、北京五輪開幕直前の令和4年2月1日、日本国衆議院は「新疆ウイグル等における深刻な人権状況に対する決議案」を採択しました。東トルキスタンの少数民族への人権蹂躪じゅうりんの度は、20世紀のホロコーストを規模において越えるとも云われています。昨夏、東京五輪関係者の差別的発言や過去のいじめ加害をもって開催反対の大合唱を叫んでいた大手メディアが今回の「平和の祭典」では全く沈黙している偽善に呆れてしまいます。

日本は、第一次世界大戦後のパリ講和会議の国際連盟委員会において、人種差別撤廃を世界で初めて主張した国です。第二次世界大戦下では、ナチス・ドイツからの度重なるユダヤ人排斥要求を受け入れず、ユダヤ人の保護を決定し、杉原千畝や樋口季一郎(J・S・バッハ研究者の樋口隆一 明治学院大学名誉教授は孫)等は、結果的に多くの命を救いました。私たちの祖先には、ユダヤ人に救いの手を差し伸べ、人道主義を貫いた人々がいます。

このような歴史の上に立つ私たち、そして神様がお作りになった清教学園に選ばれて立っているみなさんには、どれほど大きな愛情と期待を神様から受けているかを自覚していますか? ぜひともそれを感じてもらいたいと心から願います。みなさんは神様に愛されている子、平和を作り出す人、世の光、地の塩なのです。

2021年度の学年が終わろうとしています。みなさんがこの一年も立派に成長し歩んで来られたことを神様に感謝します。この時期は別れがあり、また新しい出会いを待つ時でもあります。古いものが過ぎ、復活の命が漲る新しいスタートへ胸躍らせる時です。そして、新しい学年、新しい道への出発となる一年が、さらに恵みを受けて豊かでありますように神様の祝福を心からお祈りいたします。